

令和5年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

令和6年4月9日現在

研究課題名	ソヴィエト文学における独ソ戦の記憶：イ・グレーコワの小説を中心に	
申請者	氏名	所属機関・職
	前田 しほ	島根大学法文学部・准教授

## 研究成果の概要

申請者は、ソ連の戦争記憶を記念碑と文学の両面から研究している。2023年度は、ブレジネフ期の文学作品における戦争体験の表象を、イ・グレーコワの中編小説「未亡人たちの船」を中心に研究した。女性が描く戦時体験は、銃後であることが多く、従来戦争文学のカテゴリーでは検討されてこなかった。とりわけこの作品は、女性の空襲体験や銃後の生活、夫が従軍中の不貞、その結果としての妊娠、帰還した夫との不和、息子の困難な思春期が話題であり、英雄性から大きく逸脱している。ソ連（にしても、現代ロシアにしても）では、戦争記憶は英雄性に偏り、ヴァナキュラーな記憶がナショナルな欲望に抑え込まれる傾向が強い。しかし、イ・グレーコワはなめらかな戦争神話に日常レベルでスティグマを書き込むことで、忘却の政治（都合の悪いことを抑え込む政治的動機）に抗している（あるいは不満や怒りをもらしている）と考えられる。この抵抗・不満・怒りは、閉鎖された船（寡婦ばかりが住人のコムナルカが「船」と呼ばれる）の「うち」で、泣き言、罵声、沈黙、失語症によって表明される。「語らない」という選択が何を語っているのか読み解くことによって、明確に言語化されてこなかったヴァナキュラーな戦争記憶とナショナルな戦争記憶の実態と両者の関係性を明らかにすることが最終的な目的である。

7月と9月の二度にわたり滞在し、北海道大学図書館の所蔵するロシア語雑誌や英語海外電子ジャーナルの文献収集を進めることができた。イ・グレーコワに関する資料の収集を実施したほか、ソ連時代の美術系雑誌の戦争に関わる作品（絵画・彫刻・記念碑等）を閲覧することで、「雪解け」から「停滞」前半にかけての公式上の視覚的変化が劇的であることも観察することができた。

これらの複写資料を持ち帰り、論文としてとりまとめるために、分析・考察をつづける予定である。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

なし（資料をとりまとめ、近いうちに論文として発表したい）

市民向け講演会として島根県教職員組合高校集会にて講演した。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

なし